

2022年10月3日

博士学位請求論文要旨

論文題名 戦国期における地域権力の形成 ―越後国長尾氏を中心に―
提出者 前嶋 敏

論文の要旨

①論文の主題（テーマ）、当該研究分野における位置づけ

本論文は、戦国期における地域権力が、各地域の事情に応じてどのように形成され、またそれを踏まえて領国内の配下諸将とどのような政治的関係を構築したのか、具体的に検討することを通じて、権力の形成のありよう、またその維持・変容（強化）について明らかにすることを目的とする。

一九八〇～九〇年代に矢田俊文氏が提示した戦国期権力の流れを筆者なりにまとめると、およそ次の通りである。

- 1 室町幕府は十五世紀中葉に公田段銭賦課方式を放棄し、地方支配にかかる権限を縮小させる。
- 2 それにともなって守護の権限が拡大し、守護が一国公権を独占する可能性が生まれる。なお幕府が地方政治に干渉しなくなったことにより、守護だけが一国公権を独占する必要もなくなる。一国の公権の維持のされ方は、地域によって大きく異なる。そして守護をはじめとする地方の権力が自立を始める（戦国時代の第一段階）。
- 3 十五世紀末、室町幕府は文書行政としても地方支配を放棄する。幕府が全国支配権の主要な部分を放棄した十六世紀前半は守護全盛の時代となる。
- 4 十六世紀中葉以後、幕府・守護権力の大幅な権限縮小と経済的変化に対応して、室町幕府―守護体制による支配の再編を許さない経済的・権力的事態として、戦国領主と地域権力（地主連合・小領主連合）の確立が進行する。そして戦国期守護は自らが戦国領主としての要素を持つことなしに従来の支配体制を維持することはできなくなる（戦国時代の第二段階）。
- 5 十六世紀中葉から統一権力が成立するまでの時期も依然として中世国家体制の枠組内にある。十六世紀中葉から統一権力形成期までの基本的な政治体制は、幕府・戦国期守護・本願寺が、戦国領主・地域権力（地主連合・小領主連合）・一向一揆権力を、権威を基本としてゆるやかに統制する体制である。各機関・各権力が独自に機能しているにもかかわらず、それぞれがルーズな関係でしか結びあっていない体制、それが中世社会最後の一段階、戦国期社会の特質である。

上記については、とくに以下の二点が注目される。

- A 権力の変容として十六世紀に第二段階を設定していること。
- B 第二段階以後の戦国期権力（戦国期守護）が権威を基本として国内の戦国領主などを統制・編成したとされること。

Aについては、室町幕府の崩壊以後、十六世紀初頭から中葉における地域の戦国期権力の転換期は、各地域の事情などによってさまざまな変質の過程があることが指摘されている。またBについては、十六世紀中葉以後において地域権力を担う者の出自と権威を求める方向性は一様ではないことが示されており、それ以後に登場した地域権力による国内諸将の統制、政治的な関係構築に関しては、諸将との関わりを具体的に見直すなかで、公的権威がどのように関わるのか（あるいは関わらないのか）を判断する必要があることがうかがわれる。

そこで本論文では、以下の二つの視角を設定して検討を行う。

- 1 室町幕府一守護体制の崩壊から地域権力の登場に至るまでの時間的なずれを意識しつつ、十六世紀前半期～中葉の権力の様相について通時代的に見通す。
- 2 それを踏まえて十六世紀中葉頃に新たに登場、あるいは変質した地域権力と国内諸将との政治的関係のありようについて、とくに国内諸将個々の動向を踏まえて明らかにする。

なお、戦国期の越後では、十五世紀以来守護上杉氏、守護代長尾氏の体制が続いており、守護一守護代の相互補完的な権力がつくられたとされている。また、十六世紀中葉に守護上杉氏が滅亡し、以後長尾氏が単独で権力を担うようになる。そして、景虎は守護とは異なる官途や職（権威）を獲得する。本論文の視点からすると、守護と異なる立場から単独権力が形成された点や公的権威を獲得した点など、十六世紀前半期の権力の変容をたどり、またそれを踏まえて国内諸将との政治的関係について考える上では、越後の長尾氏（上杉氏）は最適な題材のひとつと考える。そこで本論文では十六世紀前半から中葉以降にかけての長尾氏権力に関する通時代的把握を試みる。

本論文は、その地域事情などによってさまざまな様相を示す十六世紀前半期の地域権力の形成過程のなかで、越後国の長尾氏を題材として、十六世紀前半から中葉以降にかけての地域権力の形成ならびに変容についての見通しを示すものとして位置づけられる。

②論文の構成（目次・各章の概要）

本論文の構成および各章の概要は以下の通りである。

序章 本論文の課題と方法

第一部 十六世紀前半期越後における権力の動向

第一章 越後永正の内乱と長尾為景 ―北信濃諸将との関わりを中心に―

第二章 長尾為景の越中出陣と守護・守護代

第三章 越後享禄・天文の乱と長尾為景

第四章 長尾晴景の権力形成―伊達時宗丸入嗣問題を通して―

第五章 長尾景虎の権力形成と晴景

補論一 戦国期越後における堅切紙の文書発給について

—永正～天文期の長尾上杉氏を中心に—

第二部 十六世紀中葉以降における長尾氏と権力 —国内諸将との関係を軸に—

第六章 長尾景虎の権力と直江実綱

第七章 長尾景虎の権力と山吉氏

第八章 長尾景虎の国外出兵と揚北衆

補論二 戦国期越後の贈答における品目について

終章

本論文は二部構成である。まず第一部では十六世紀前半期における越後守護代長尾氏の権力移行・形成の過程を具体的に確認することを通じて、当該期越後における守護上杉氏・守護代長尾氏の関係性を見直し、また戦国期権力としての長尾氏について考察する。第二部では、守護上杉氏滅亡以後の長尾氏当主景虎と越後国内諸将との政治的關係について、国内諸将個々の動向の分析を通じて把握し、あわせて越後守護滅亡以後における長尾氏による権力の強化・変容などについて検討する。

以下各章の概要を述べる。第一章では、長尾為景が越後守護代となった直後に勃発した越後永正の乱を題材として、とくに越後守護上杉定実および長尾為景と北信濃の武士とのかわりを中心に再検討する。

第二章では、越後守護が不在となった永正十一年（一五一四）以後の越後国における守護代長尾為景の行動について、とくに永正十六年以後に展開した越中侵攻とそれ以後の動向を主な題材として検討し、このことを踏まえてあらためて守護上杉氏と守護代長尾氏との関係性を見直す。

第三章では、従来長尾為景が政治的・軍事的に劣勢状況に追い込まれたとされる越後享禄・天文の乱の経過に関して、為景に敵対したとされる揚北衆（とくに中条氏）、また従来ほぼ顧みられなかった守護上杉定実の動向とともに再検討し、あらためて長尾為景権力の形成過程のなかに位置づける。

第四章では、伊達植宗の三男時宗丸を上杉定実の養子とする計画がなされたことに端をして越後国内が争いとなった伊達時宗丸入嗣問題を題材として、この時点における守護上杉氏と守護代長尾氏の関係、また守護代長尾為景からその子晴景への権力移行について明らかにする。

第五章では、伊達時宗丸入嗣問題を経て為景から家督を奪取した長尾晴景の権力の様相を明らかにし、またそれを踏まえて晴景から景虎への権力移行について、またその時点における上杉定実の立場などについて検討する。

補論一では、越後国では十六世紀前半、長尾為景期以降に文書発給にあたって多用された堅切紙の古文書形状について、その使用のありようを明らかにし、そのことを通じて発給者

(長尾氏) と文書受給者との関係の変容を示す。

第六章では、長尾景虎とその重臣直江実綱の政治的関係について、実綱の動向の分析を通じて明らかにする。そして、あわせて上杉定実没後の景虎権力における直江氏の位置づけを見直す。

第七章では、越後三条に拠点をもち、越後蒲原以北の代官的立場で活動したとされる山吉氏の天文二十～二十一年(一五五一～五二)頃の活動と、永禄九年以後長尾景虎(上輝虎、謙信)の権力中枢部での活動が知られる山吉豊守の活動との比較検討などを通じて、長尾氏(上杉氏)権力と山吉氏、また豊守との政治的関係などを見直す。

第八章では、北信濃をめぐって十五年にわたって武田信玄との間に繰り広げられた川中島合戦への出陣要請などを題材として、長尾景虎(上杉輝虎)と揚北衆との関係の変容とその契機を明らかにする。

補論二では、長尾景虎(上杉謙信)が他の武将たちなどと繰り返し行っていた贈答に用いられた品目の変化について明らかにする。そして、その変化と景虎の権威の上昇との相関性について考察する。

③論文の独自性

本論文では、①越後国を題材として、十六世紀初頭から中葉以後までの地域権力の様相を通時代的に明らかにする点、②またその成果をうけて、十六世紀中葉に守護上杉氏の滅亡をうけて単独の権力を成立させた長尾氏が、国内の諸将とどのような政治的関係を構築していくのか、諸将個々の動向の観点から、景虎が得た公的権威との関わりを意識しつつ明らかにする点に独自性がある。

まず、第一点目について述べる。戦国期越後においては、守護—守護代の相互補完権力が十六世紀半ばまで続くことが指摘されてきた。本論文では、通時代的に越後の権力の様相を考察し、以下の二点を指摘する。

- 1 十六世紀前半～半ばまでの守護代長尾氏にとって、その実力を行使する上では守護上杉氏の権威がその背景として不可欠であった。守護上杉氏と守護代長尾氏は相互補完的な権力を構成していた。
- 2 その一方で、複数回に及んで長尾氏(守護代)は上杉氏(守護)を排除して独立的な権力を構築しようとしていた。その意味で、十六世紀前半～半ばの段階ですでに守護と守護代による相互補完の体制、あるいは守護の権威はすでに揺らぎつつある段階にあった。

さらに、越後国内の諸将の側においても、守護の権威を背景とした守護代による統率、上杉氏と長尾氏の相互補完による体制としてその権力を理解する一方で、体制自体に否定的な諸将もみられ、守護と守護代による権力に関するゆらぎは体制全体に及んでいたことを示す。

そして、十六世紀前半期は、ゆるやかに守護—守護代の体制から転換していく過程にある

こと、それは地域の支配を担う側（長尾氏）による積極的な体制変革ではなく、公権を担う側（上杉氏）の滅亡の受け入れという受動的な動きであったことを指摘する。また、天文九年（一五四〇）における上杉定実への伊達時宗丸の入嗣交渉およびそれを契機とした争い（伊達時宗丸入嗣問題）をへて、入嗣が失敗したことは一つの画期をあらわすと評価する。

次に、第二点目について述べる。

本論文では、越後国内諸将個々の動向を分析し、それを踏まえて長尾景虎との政治的關係について検討する。また、あわせて景虎の獲得した公的権威との関わりについて考察を加える。

たとえば景虎と越後下越に拠点をもって活動した揚北衆とよばれる諸将との関係について、出陣要請の観点からその変遷をたどる。そして、永禄元年（一五五八）に甲斐武田氏が越後に侵入してきたという現実的な脅威を契機にして、景虎は軍事動員力を強化し、揚北衆も側もこれを受け入れる素地ができていったとする。また翌年に永禄二年の上洛による家格上昇などによる関係変化が起きていること指摘する。そのことから、権威そのものは、景虎権力とこれを受け入れる国内諸将との関係の変化のなかで、その正当性に関する理論的根拠となっていたとする。ただし、上洛において権威を求める活動は実質的な統制と同時並行的に行われていたと考えられ、景虎による公的権威の獲得は、さまざまな方策をもって権力を強化していく過程の一つとしてそのなかに位置づけられる、とする。

④今後の課題

本論文においては、十六世紀前半から半ば以後にかけての、越後国における権力の形成・変容、また十六世紀半ば以後における諸将の行政機構への登用、また軍事動員等の様相を検討し、十六世紀前半期における越後国の権力がゆるやかに守護の存在、またその意義を否定していく段階にあること、またその後の越後国における権力が、諸将に対する統制を強化しながら、公的な権威を支配の正当性の理論的根拠としていくことの見通しを示す。今後、とくに権力による諸将統制の実態に関して、上記の見通しを踏まえて考察を深めていきたい。